

序

経済同友会は、二〇一六年四月三〇日に創立七〇周年という節目を迎えた。

終戦直後の荒廃の中で、「新生日本の構築に全力を捧げたい」と誓った八三名の設立発起人たちの志は、数多くの諸先輩によって脈々と受け継がれてきた。七〇年という歳月を経た今もなお、一四〇〇名を超える同志が経済同友会に集い、たゆまぬ改革を求め、実行する原動力となっているのは、この志にほかならない。志ある経営者同士が切磋琢磨し、個々の企業や業界の利害や既得権にとらわれることなく、自由闊達な議論を展開し、常に時代の先駆けとなるような理念・思想を世に問うてきた歴史は、経済同友会の大きな財産である。

今日、戦後の経済発展を経て、成熟した先進国となった日本は、大きな転換点を迎えている。少子・高齢化等の構造問題への対応はもちろんのこと、グローバル化、デジタル化、ソーシャル

化という世界的な大きなうねりの中で、経済・産業・社会のあり方を大きく変革していかなければならない。こうした激動の時代である今こそ、経済同友会の真価が問われる時である。経済同友会は、自らも進化を続けながら、希望の持てる持続可能な社会を将来世代に引き継ぐために、めざすべき社会の姿を描き、その実現に向けた社会変革の先導者となる覚悟である。

その意味で、ここで経済同友会の七〇年間の歴史を振り返り、多くの先人たちが残してきた先見性、革新性に満ちた足跡をたどることは、非常に意義のあることであった。読者各位にとって、この『七十年史』で描かれた臨場感あふれる議論・論争の歴史に触発され、あるべき社会像を存分に語り合い、その実現に向けた第一歩を踏み出す一助になれば幸いである。

代表幹事 小林喜光